

「いかがわしい」の成立と定着

村山, 実和子
福岡女子短期大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/3077255>

出版情報 : 語文研究. 128, pp.32-14, 2019-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「いかがわしい」の成立と定着

村 山 実和子

1. はじめに

「いかがわしい」という形容詞は、現代語において次のように用いられ、^(注1)疑問に思われる)〈よくない〉〈道徳上、風紀上好ましくない〉といった意味を表す。^(注2)

- (1) a. このようなマルチ商法に使用される商品というものは、ここで見てもわかるように、大体何となく疑問を持たざるを得ないような、いかがわしいという言葉が適切であるかどうかわかりませんが、そういう感じを持つような品物が多いわけでありませけれども

(国会会議録〔1976〕OM11_00005, 359980)

- b. このごろは見て見ぬ振りをする風潮がございますから、そうでなくて、いかがわしいことをやっておる、いじめ行為をしておるというのを見つけたら、よその子供であっても遠慮なしに注意するというような

(国会会議録〔1996〕OM51_00003, 68590)

- c. 調べによると、■■容疑者は九月十八日、ツーショットダイヤルで知り合った十勝管内の無職少女＝当時（十五）＝が十八歳未満であることを知りながら、現金数万円の受け渡しを約束し、同管内のホテルでいかがわしい行為をした疑い。^(北海道新聞〔2002〕PN2e_00015, 6890)

この語の成立について、『日本国語大辞典 第二版』（小学館、以下『日国』とする）には、「いかがしい」の変化したもの、という注記が見られる。これは現代共通語には見られない形式であるが、その「いかがしい」の項では次の語釈・用例が与えられる（下線部は稿者）。

(2) いかが - し・い【如何】

〔形口〕文いかがが・し〔形シク〕（「いかが」を形容詞化したもの）

(1) 疑わしい。おぼつかない。不安である。

* 御伽草子・一本菊（室町時代物語大成所収）〔室町末〕「つねにまいりて見候に、いかかしくおもひとがむべき人なども候はず候」

* 浄瑠璃・ゆいせき浄〔1692〕五「だいだいのゆづり状、それにおかれ候事いかがしく候へは、〈略〉すけちかあづかり申べし」

(2) よくない。見苦しい。どうかと思われる。

* 歌舞伎・小栗十二段〔1703〕二「おっ付け御赦しござりませう。是は如何しうござりますれども、此金子をあげまする」

ところで、「いかがわしい」をその構成要素から見てみると、「いかが(如何)」と「わしい」という要素からなることがわかる。村山(2019)ではこの点に着目し、「いかがわしい」を、形容詞化接尾辞「ハシ(ワシイ)」(以下、「ハシ」に統一する)の派生語の一つとして取り上げた。「ハシ」は中古に成立した接尾辞で、主に動詞を語基にとって形容詞を派生していたが(「似付く」+ハシ→「似つかはし」など)、中世以降は衰退したと見られていた。それに対し、村山(2019)では、中世～近世にも「ハシ」による造語が見られることを示し、さらにそれらに既存のシク活用形容詞との対応関係が見えることから、中世以降の「ハシ」が、形容詞をもとに二次的に語を派生する形式に変容したことを論じた。その「ハシ」の語例と、変遷の概略を示したものが以下の表1である。

表1 接尾辞ハシによる造語の変遷

時期	当該時期に新たに造語された形式(その語基) ※現代共通語に持続する形式を太字で示した	造語の傾向・特徴
中古	あなづらはし(侮る)・ につかはし (似付く)・ そしらはし(誇る)・つぶらはし(潰る)・よ づかはし(世付く)・おごらはし(驕る)・な まめかはし(艶めく)・はばからはし(憚る)・ いそがはし(急ぐ)・いたづかはし(働く)・か たくなはし(頑な)	動詞からの派生が中心
中世	ありつかはし(有り付く)・いまめかはし(今 めく/いまめかし)・そそかはし(そそく/そ そかし)・もどかはし(もどく/もどかし)	語幹が共通するシク活用 形容詞が存する(動詞から の派生とも形容詞から の類推ともみなせる)
近世	いたまはし(いたまし)・いまいまはし(忌々 し)・はづかはし(恥づかし)・ほこらはし(誇 らし) いかがはし(いかがし)	シク活用形容詞からの 派生が中心

本稿で取り上げる「いかがわしい」の場合、文献上に見られるようになるのは近世後期のことである。それに先んじて意味的・形態的に類似した「いかがしい」が見られることから、前稿ではこれも「ハシ」による派生形容詞の一つとみなしていた。ただし、中世以降に出現する対を、仮に「Xシ/Xハシ」とすると、「Xハシ」がいずれも現代まで持続せず、「Xシ」が継続的に使用されるのに対し、「いかがわしい」は例外的に現代共通語に残り、「いかがしい」は用いられなくなる。したがって、「いかがわしい」を「ハシ」による派生形容詞

とみなす場合、ほかの語群と異なるふるまいを見せることに説明が必要となる。しかし、前稿ではその要因については今後の課題としていた。

また、「いかがしい」から「いかがわしい」への変化（あるいは交替）を想定したとき、中世～近世の「いかがしい」と現代の「いかがわしい」とで、その意味が少しく異なるところがある。

(3) a. だいだいのゆづり状、それにおかれ候事いかがしく候へば〈略〉すけ
ちかあづかり申べし。 (浄瑠璃・ゆいせき譚・五〔1692刊〕)

b. 扱々切なる御志、おつけ御赦しござりませう。是はいかがしうござ
りますれども、此金子をあげます (歌舞伎・小栗十二段・二〔1703初演〕)

これは先に挙げた(2)『日国』「いかがしい」の項から引いた例である。(3a)は家産の相続について記した書状をだまし取るため、「あなたのもとに置いておくのは不安であるから、自分(すけちか)が預かろう」と申し出る場面、(3b)は、親から勸当された知人に「これはよくないけれども」と断りを入れて金子を渡す場面である。いずれも、現代共通語の「いかがわしい」の意味・用法とはそぐわないように思う。一方、現代共通語の「いかがわしい」は、先に挙げた(1c)「いかがわしい行為」のように、〈道徳上、風紀上好ましくないこと〉を表すことがある。これは「いかが(如何)」自体に含意されるものではないため、形容詞化したのちに獲得した意味であると思しいが、(2)に引いた「いかがしい」の語釈には見られないものである。したがって、仮に「いかがしい」が「いかがわしい」に変化したとするならば、そこには何らかの意味変化が生じているものと考えられる。

そこで本稿では「いかがわしい」という語を対象に、接尾辞「ハシ」との関係を再検討しつつ、次の3点について考察を試みる。

- I. 「いかがわしい」という語はいつごろどのように成立したか
- II. 「いかがしい」が衰退し、「いかがわしい」が持続した背景はどのようなものか
- III. 「いかがしい」と「いかがわしい」に意味差はあるか、または「いかがわしい」の成立後に意味変化があったか

なお、「いかがしい」「いかがわしい」はそれぞれ、「いかがし／如何し／如何敷」「いかがはし／如何はし」などと表記されるが、本稿では汎称としては「いかがしい」「いかがわしい」を用いることとする。

2. 接尾辞「ハシ」とその派生形容詞

「いかがわしい」の派生の経緯を見る前に、本節では、村山（2019）を元に接尾辞「ハシ」の概要を確認し、その派生形容詞と「いかがわしい」との共通点と相違点を示す。

「ハシ」は、ハ行四段動詞に接尾辞「シ」が接して派生した形容詞（→4a）が上代～中古に数多く生産されたことで「～ハ+シ」の部分に異分析が生じ、形容詞化接尾辞として成立したものの（→4b）と見られている（阪倉1966、村田1988）。

(4) a. ～ハ+シ : 例「疑ふ」+シ→「うたがは・し」、「思ふ」+シ→「おもは・し」

b. ～+ハシ : 例「似付く」+ハシ→「につか・はし」「侮る」+ハシ→「あなづら・はし」

「ハシ」による派生形容詞（以下、「～ハシ」とする）が表す意味について確認するために、語基動詞と派生形容詞とを対比させる形で、次の2例を挙げる。

(5) の場合、(5a)「似付く」（よく調和する、似る）という変化に対して、(5b)「につかはし」は、直前に和歌を引用し、子供が詠んだ歌にしては「いかにもその状況に適している」ことと、そのことへの評価を表す。また(6)では、他者を「侮る」という主体の態度そのものを表す(6a)に対し、(6b)は「軽んじたくなるように」思われるであろうという主体の評価によって、盛りを過ぎた自分の外見を表している。このように、「～ハシ」は対象となる事物について、表現主体の評価・判断をもとに〈いかにも～と思われるような状態〉を表す。

(5) a. 偽りも似付きてそする〔似付曾為〕いつよりか見ぬ人恋ふと人の死に
せし
(万葉集・巻11・2572〔8C後〕10-万葉0759_00011, 60470)

b. いふかひなき者のいへるには、いと似つかはし

(土左日記・一月十五日〔934〕20-土佐0934_00001, 46000)

(6) a. 人にあなづらるるもの。築地のくづれ。あまり心よしと人に知られぬ
る人。
(枕草子・人にあなづらるるもの〔1001〕20-枕草1001_00025, 40)

b. 今はおのれは、さだ過ぎにたるに、いとあなづらはしく思ひはべるめ
るを
(夜の寝覚・三〔1045-68頃〕)

「ハシ」は、中古においては、動詞を主たる語基としてシク活用形容詞を派生する接尾辞であったが、中世以降、中古の「～ハシ」は次第に用例が得られなくなる。そして中世以降に派生した新語の多くは、表2に示したとおり、既存のシク活用形容詞との対応が見られるという特徴がある。表中、共通する語幹部分をXとし、現代共通語に見られない形式は網掛けとした。中世以降の「～ハシ」は、既存のシク活用形容詞に対応する形式として成立したものと思いが、いずれも近代までに使用されなくなる。語幹が共通する両形式を比較して

も「ハシ」に独自の意味は見出し難く、すでに定着していた既存の形式と交替するほどの勢力は持ち得なかったようである。「ハシ」自体も、近世後期以降は生産力を失っていく。

表2 中世以降に出現する「～ハシ」と対応する「～シ」(村山2019:25)

	Xハシ	Xシ	Xに相当する語	初出 (Xハシ/Xシ)
1	ありつか-はし	- (注4)	有り付く (動詞)	1221頃 / -
2	いまめか-はし	いまめか-し	今めく (動詞)	1258/970
3	そそか-はし	そそか-し	そそく (動詞)	1275/1010
4	もどか-はし	もどか-し	擬く (動詞)	室町末 /970
5	はづか-はし	はづか-し	恥づ (動詞) +か (情態言)	16世紀後半 /806
6	いまいま-はし	いまいま-し	忌む (動詞) の重複	1626頃 /1010
7	いたま-はし	いたま-し	痛む (動詞) か	1686/1238
8	ほこら-はし	ほこら-し	誇る (動詞) か	1831/914
9	いかが-はし	いかが-し	いかが (形容動詞語幹)	1813/ 室町末

前稿では、この接尾辞「ハシ」の中世以降の展開を「接尾辞による形容詞の派生」そのものの史的変遷に位置づけて論じた。「ハシ」の造語法が変容する背景として、同じく、既存の形容詞を基にした二次的な派生が、中世～近世にかけて盛んに行われていたことを指摘した (例えば、「かわいい」>「かわいらしい」、「むごい」>「むごたらしい」、「むさい」>「むさくろしい」など)。ただし、このような造語法は、総じて現代語で生産的であるとは言えない。その理由として、上接部分が形容詞語幹という拘束的な要素であり、またあらゆる形容詞に対応するものでもなかったため、自由に造語するには制約があったのであろうと解釈した。

さて、「いかがわしい」という語についても、①「～ハシ (ワシイ)」という形態をとること、②「いかにも～と思われるような状態」を意味すること (いかにもいかがなものかと思われる状態→好ましくない状態)、③語幹が共通するシク活用形容詞が先んじて存すること、の3点において、中世以降の「～ハシ」の特徴と合致する。しかしながら、多くの「Xハシ」が現代共通語に持続しない中で、「いかがわしい」は唯一の例外として現代共通語に定着する。「いかがわしい」が接尾辞「ハシ」による派生形容詞であるならば、なぜ、この語だけが例外的に持続するのであろうか。次節ではこの問題を考えるために、「いかがわしい」「いかがわしい」の両形式について、時代ごとの変遷を見ていく。

3. 「いかが」から派生した2つの形容詞

3.1 「いかが」について — 形容詞派生以前 —

「いかがしい」「いかがわしい」はともに、「いかが（如何）」が形容詞化した語と見られている。そもそも「いかが」とは、副詞「いかに」と助詞「か」による「いかにか」が変化したものとされ、以下の例のように、ある事態に対しての疑問・反語表現に用いられる。

(7) a. むかし男、京をいかが思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて

(伊勢物語・五十九〔10C前〕20-伊勢0920_00001, 107570)

b. つれづれも慰む方なくては、いかがは明かし暮らすべからむ

(源氏物語・薄雲〔1010頃〕20-源氏1010_00019, 7550)

中世以降の「いかが」は、文末にあって事態に対する疑念を表す用法（8a・b）に加え、形容動詞としても用いられるようになる（8c・d）。

(8) a. さのみ心弱くてもいかがとて、つれなく振捨てつ

(十六夜日記〔1279-82頃〕30-十六1280_00002, 670)

b. 斑ナル牛ノ子ナレバ、子ハヨケレドモ、祭ノ牲ニ用イゴトハ如何ト云人アルベシ

(応永本論語抄〔1420〕：『時代別国語大辞典 室町時代編』「いかがしい」の項より引用)

c. 短キ世ニ、片時モタダ居ラシテハイカガナホドニ、夜モ燭ヲトツテアソブベキゾ

(中華若木詩抄・巻上〔1520頃〕)

d. さて〜にくひやつで御ざる、ちやうちやくいたさうとぞんずれども、人おほければ、ぐわいぶんもいかにとて存てかんにんを致た

(虎明本狂言集・河原太郎〔1642写〕40-虎明1642_05022, 10360)

(8c)は、短い生涯をむだに暮らすことを、(8d)は人目が多いところで妻を打ちのめすことが世間からどう見えるかを、「いかな（じゃ）」という語で表している。いずれもそれを「好ましくない」ものとして捉えていると解釈できるが、そのような否定的な評価が生じるのは、「いかが」という語が、もともと対象に対して〈何らかの疑念が持たれる〉〈是認しがたい〉意を示すことに拠るものと考えられる。

3.2 「いかがしい」の成立 — 中世・近世 —

3.2.1 「いかがしい」の使用状況

その「いかが」から派生した形容詞「いかがしい」は、早くは中世前期に見える。以下、(9)に中世前期の例を、(10)に中世後期の例を挙げた。

(9) a. 年寄りては、いかがしく見て候人も、ゆかしくみたくおぼえ候けり。
(惠信尼の消息・文永四年九月七日〔1267〕)

b. あまりにいかゞしくて、定ひか事に候らん
(某勘返抄・寛元四年一月〔1246〕：辛島2003)

(10) a. つねにまいりて見候に、いかがしくおもひとがむべき人なども候はず
候 (御伽草子・一本菊〔室町末〕：『日国』「いかがしい」の項より引用)

b. 我御身を恐るる体を見ば、未練なりと人の思はんもいかがしけれ
(icagaxiqere) ば、かれこれ以て、御敬ひの時節にあらず
(サントスの御作業の内抜書・巻第二〔1591刊〕)

『日国』の「いかがしい」の初出は(10a)の例であり、中世前期の例はかなり遡ることになるが、辛島(2003)においても、「いかがしい」は「仮名文書に見られる口頭語的な語彙」の一つとして寛元四(1246)年の書状中の用例が報告されている(→9b)。したがって、この形式は中世前期には用いられており、「文献に一般的に見られるようになるのは室町末・近世になってから」(辛島2003:203)であったものと推定される。

近世に入ると、さほど頻度は高くないが、以下に示すようにジャンルを問わず用例が見られるようになる。^(注7)以下、(11)には会話内の例、(12)にはそれ以外の例を挙げた(例中の〔 〕には「いかがしい」と評価・判断される内容を補足して示した)。

(11) a. 〔おてるの前→藤波内蔵助〕若し此のまゝの姿にて召し具せられ給はん事、うき世の聞えもいかゞしく思召しさふらはば〔自分を連れて行くことを、世間体もよくないと思し召しならば〕、自らが命を御手にかけてさし殺し給ひて後、越路とやらへ御下向まませ(浮世草子・花の名残・巻四〔1684刊〕)

b. 〔男→侍〕俄雨の御難儀、御身のうへによしなし〈中略〉何とやらん馴々敷申事にて候得共、此みせさきも、上下の人目も如何敷候へば〔侍たちが軒先で雨宿りしている様子は人目も憚られますので、此かたへ御入候まじや
(浮世草子・五ヶ津余情男・一〔1703刊〕)

c. 〔侍→喜多八〕ホウそれはきのどく。^{とちう}途中でものを求るは如何敷^{いかゞしい}〔侍が道中で物を買うのは望ましくない〕が、お身たちの難儀とあれば、求てつかはそふ。
(滑稽本・東海道中膝栗毛・二編・上〔1803刊〕)

d. 〔本田次郎近常→藤兵衛〕^{このや}此家を見れば^{をんなあるじ}女主の住居の様子、^{すまゐ}長座いたさば^{やうす}さだめて^{ながる}迷惑^{めいわく}また^{ないへ}内々のことを、^{ひとなか}他人中でたづね申もいかがしい〔内々のことを人前で尋ねるのもよろしくない〕。

- (12) a. 懐紙に恋なくていかゞしく〔俳諧1巻に恋の歌がないのはどうかと思う〕、むかしより沙汰し来る。なくてかなはざる事か。好む心はいかにと言へば
(俳論・三冊子・白雙紙〔1702刊〕)
- b. 又天性の淫婦あり、丈夫の在りても偷漢の悪事、其のほか如何敷き〔夫がいても密夫をもつなどの好ましくない〕こと共あれども
(読本・英草紙・二〔1749刊〕)

このように「いかがしい」は、「いかが」の形容動詞用法と同様に、対象を疑いあやぶむことや、それに伴う否定的な評価を表している。このことは、次の『捷解新語』の例にもよく表れている。(13)の例は、「多人数で長期間逗留することはどうかと思われるので」という文意であるが、原刊本では「いかがぢやほどこに」とあった箇所が、100年ほど下った重刊本では「いかがしう御ざるにより」と変じている(→13c)。重刊本には「いかがしい」の例がもう一例ある(→14c)が、これは(14a)に挙げたように原刊本では「むてうほう(無調法)」と表現されていた箇所であり、〈行き届かないこと〉〈よくないこと〉を表している。

- (13) a. 【原刊】じやうげ たにんちうにて ながなが とうりうするも いかがぢやほどこに
b. 【改修】じやうげ たにんずにて とうりういたしまつするも いかが御ざるにより
c. 【重刊】じやうげ たにんずにて とうりういたしまつするも いかがしう御ざるにより
d. 【文釈】上下 多人数にて 逗留致ますも 如何敷御座るにより
- (14) a. 【原刊】けつく むてうほうかとわ ぞんずれども
b. 【改修】けつく むてうほうなこととわ ぞんじまつすれとも
c. 【重刊】けつく いかがしうわ ぞんじまつすれとも
d. 【文釈】結句 如何舖は 存ますれ共

(原刊本：1676刊、改修捷解新語：1748刊、重刊捷解新語：1781刊、捷解新語文釈：1796刊)

このほか、辞書等に記述は見られないが、人に金品を贈る場合に、逆接表現を伴って定型的に用いられることもあったようである。

- (15) a. 〔後藤左衛門女房百萬→横山四郎景高〕扱々切なる御志、おつけ御赦しござりませう。是はいかがしうござりますれども、此金子をあげます
(3b)の再掲)

- b. [馬回り役の侍→おたね] さて何がな土産こころざと志し候へども、さして変りし品もなし。これは関東麻くわんとうぞとて名物の真芋まお、いかゞしくは候へ共御留主の間おたね様真芋まおを御お績うみなさるゝと道中すがら家中の沙汰さた

(浄瑠璃・堀川波鼓・中 [1707初演])

- c. [油屋叔父太郎七→たばこ切り鬼門喜兵衛] モシ、こりゃ餘りいかゞしうござりますが、この金子いで弟御の弔ひ被成、施餓鬼なりと被成て進ませて下くださりませ。

(歌舞伎・お染久松色讀販 [1810初演])

このことについて、明和4(1767)年の『新板書札調法記』には、「軽微」の類義表現として「如何敷存いかしくず」が挙げられる。当期において、人に金品を贈る際に「わずかながら」と断る表現として「軽微」を使用した例が見られるが、「いかがしい」の場合も「よくない」という意味をもとに、謙遜する意味合いで用いられていたであろう。

3.2.2 「いかがしい」の位相

さて、以上の例を通して注目されるのは、会話文中の用例のほとんどが武士の発話、または武士に対する発話に偏る、という点である。ここで、試みに古記録・古文書のデータベース(注9)を利用して「いかがしい」の例を検索したところ、古記録では21件、古文書では50件と、口語資料を上回る数の用例が得られた。以下、その例を抜き出して挙げる。

- (16) a. 假令例有之候共、御神事之儀時宜如何敷い [神事の作法がおぼつかなく] 被思召
(伝奏広橋家雜掌口上書・元禄六年九月三日 [1693])
- b. 近比堂上門弟之面々兵具を被買求候説有之、甚如何敷い [堂上の門弟が兵具を買うというわさがあり疑わしく] 候
(広橋兼胤公武御用日記・宝暦八年六月二十六日 [1758])
- (17) a. 病中に寒国へ罷下儀如何敷い [病気の折に寒国へ下るのはよくなく] 候間、上方在之而緩々と養生候様にと
(徳川秀康書状・慶長十二年 [1607])
- b. 高辻中納言召寄、此度被遷坐候 天神之聖像之事、於遷坐者勿論無子細事ニ候得共、多人数参詣及群衆候てハ如何敷い [天神の聖像を目当てに人が押し寄せて、よくない] 事抔出来候てハ気毒存候間、被遷于二階町之屋敷、門戸をも是迄之通ニ被閉置候ハ、参詣人も有之間敷候
(広橋兼胤公武御用日記・宝暦八年七月九日 [1758])
- c. 右京大夫云、前大御乳人表向ハ病気ニて退出ト兩人より申達候間、其趣ニ心得居候外無他候、併内(々)ハ勤ふり如何敷い [大御乳人は病気で

退いたことになっているが実際には勤めぶりがよくない] 事も有之御暇被下候
と申儀歟 (広橋兼胤公武御用日記・宝暦八年九月十五日〔1758〕)

(18) a. 将又、匳相之儀雖如何敷候、国之物に御座候間、硫黄千斤并笑敷物候
へ共為御慰爰元に而焼申候 (島津家久書状(折紙)・寛永三年九月廿八日〔1626〕)

b. 此縁頭壺組甚如何敷候へとも私より進呈仕候

(井伊家史料・小浜藩士三浦吉信七兵衛書状、万延元年〔1860〕)

古記録、古文書に見られる例は、(16) 不明瞭な事態に対するおぼつかなさ、疑念を示す例、(17) 望ましくないこと、よくないことを表す例、(18) 金品を贈る際の定型句に大別され、口語資料で見た例と同様に用いられている。辛島(2003)では中世に見える「いかがしい」を「仮名文書に見える口頭語」としているが、近世の状況に鑑みると、この語を用いる位相には一定の偏りがあったのではないかと考えられる。口語資料では用例数が少なく、中でも武士の発話や、武士に対する発話に偏ることは、その表れとして解釈することができよう。

3.3 「いかがわしい」の登場——近世後期・近代——

3.3.1 「いかがわしい」の使用状況

「いかがわしい」が文献上に見えるようになるのは、近世後期以降のことである。近世期の資料では確例はほとんど得られず、調査内で見出せたのは以下の2例のみであった。(19a)は目上の人物に対して進言する場面で、「陪臣である自分がでしゃばるのはどうかと思うが」という断りとして用いられている。また、(19b)は主君を諫められない人々への非難の言葉である。どちらも〈よくない、どうかと思われること〉を表現しており、かつ、武家社会の人物の発話である。「いかがわしい」は「いかがしい」より遅れて文献上に見られるようになり、「いかがしい」に比して使用例は限られるものの、その意味・用法については共通していると見てよいように思う。

(19) a. 陪臣たる私しが、差し出ますは如何はしうござれど、御大身たる小
早川帯刀さま、憚りながら、ちと御短慮かと存じまする。

(歌舞伎・傾城青陽鷗〔1794初演〕)

b. 斯やうな儀を御諫言申し上げられぬは、如何はしう存じまする

(歌舞伎・濃紅葉小倉色紙・発端〔1816初演〕)

近世においてはこのように「いかがしい」が主流であったが、近代以降に目を向けてみると、一転して「いかがわしい」の形式が多く見られるようになる。

明治・大正期の雑誌コーパスおよび、同時期の文学作品を対象に調査したところ、「いかがわしい」が49例得られたのに対し、「いかがしい」は一例も得られなかった。^(注10)まずは明治期の例を挙げる。

- (20) a. 一つは玉と書き、一つは王と書くも新らしからぬことなるにや、壘囊抄は文安年間に成りたる書なるが、其中に、象戯の馬のことをいひて、一つは玉と書き、一つは王と書くは、国に二王あるを忌むなり、これ手跡家の口伝なり、とありといふ。おのれ未だ本書に就ては見ざれど、如何はしき愚なる口伝なりといふべし。

(太陽1901-1・幸田露伴 [1867生]『将棋雑話』[1901] 60M 太陽1901_01038, 21920)

- b. 長流、契沖を国学者に数へざるかとすれば、中にはただの歌人、文法学者を国学者とするなどいかがはしき点もあれど、大体に於て、余は芳賀氏の観察の氣の利きたるに感服す、国文を学ぶものの一読すべき好著なりと云ふに躊躇せざる也

(太陽1901-3・大町桂月 [1869生]『文藝時評』[1901] 60M 太陽1901_03008, 116970)

- c. いづれ此の世にて御目もじ相叶ひ候や、如何はしゆふ存まゐらせ候へば、つたなき此の文をわがかたみとも御覧はし給り度

(太陽1901-7・別役成義^(注11) [1844生]『熊本籠城(接前處)』[1901] 60M 太陽1901_07025, 44870)

- d. 預金者は株券の所有を望まず、此に於て其の株券は頻りに銀行へ流れ込で、如何はしい銀行が陸續破綻を生ずる様になり、預金者は之に懲りて、低利でも信用ある銀行に預け替へる様になつて、終に前に述べた様な巨額な預金と為るのである。

(太陽1901-14・豊川良平 [1852生]『銀行と預金者』[1901] 60M 太陽1901_14013, 18620)

- e. 度々空腹になった事ばかりを書くのは、如何わしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。

(夏目漱石 [1867生]『坑夫』[1908])

(20a・b) はそれぞれ、古典における解釈や、他者の講義内容について不審に思い批判する際に「いかがわしい」を用いた例である。(20c) は、この世でお目にかかれるかどうか「おぼつかない」ということを表しており、(20d) は直後の「信用ある銀行」と対比的に「信用ならない」性質の銀行であることを示している。また(20e) は「(作品に書く) 事」としては、よくない性質のものであることを表している。

3.3.2 「いかがわしい」が表す意味

「いかがわしい」のごく初期の例は、「いかがしい」と同様に、ある物事に対して疑念を抱き、それを否定的に評価するものであったが、大正期以降に見られる「いかがわしい」は、〈道徳上、風紀上好ましくない〉という文脈で用いられるものが増加する。^(注12)

- (21) a. 米国では御承知の如くダンスが盛んで、到る処にダンシング・ホールがあり、夜一時二時まで多勢の男女が集つて踊つてゐるが、ダンシング・ホールの中には如何はしいのが多い。かういふ処にまでゐるのは皆な不良少年少女と云つていいのである。

(太陽1925-4・植田たまよ [生年不明] [1925] 60M 太陽1925_04042, 8920)

- b. その他ビルディング内にある銀行會社の数が三千有餘に上り、従業員の数には六七万に及んでゐる。従つてこれ等の中には、いかゞはしい会社もあり、これを中心として種々なる詐偽、横領等が盛に行はれる。幽霊会社を設立して株金を横領したり、外交員を大勢募集して其の月給を払はず保証金を横領したりする事件が相当の数に上つてゐる。

(太陽1925-11・宮沢文作 [生年不明] [1925] 60M 太陽1925_11067, 25840)

- c. あなたが再婚されたとしても、敢て世間の非難や大した不幸を招く氣遣はありません。けれどもサスガにあなたは新らしい年代の人として、其れでは何処か如何はしいと悪くはないかと感じて居られる。成る程其の疑惑にも意義がある

(太陽1925-12・中島徳蔵 [1864生] [1925] 60M 婦俱1925_12002, 25990)

「いかがわしい」がこのような文脈で用いられやすい理由として、表現主体が「いかがなものか」と評価・判断する基準が、多くの場合、社会通念や常識に照らしたものであることが影響しているのではないかと考えられる。近世末～近代初期の「いかがわしい」の例を見てみると、「陪臣である自分が目上の人物に進言すること」「歌人や文法学者とすべき人物を国学者として扱うこと」など、主観的な好悪ではなく、その判断を下す主体が属する社会において「疑念が持たれる」「好ましくない」ことを示していることがわかる。

- (22) a. 陪臣たる私しが、差し出ますは如何はしうござれど、御大身たる小早川帶刀さま、憚りながら、ちと御短慮かと存じます。 ((19a) の再掲)

- b. 長流、契沖を国学者に数へざるかとすれば、中にはただの歌人、文法学者を国学者とするなどいかがはしき点もあれど ((20b) の再掲)

そして、これは近世にみえる「いかがしい」にも共通して言えることである。

以下は近世に見られる「いかがしい」の例であるが、いずれも「うき世の聞え」「上下の人目」「他人中で」など、世間体や人目を意識した表現を伴っている点が注目される。

(23) a. 若し此のまゝの姿にて召し具せられ給はん事、うき世の聞えもいかゞしく思召しさふらはば (11a) の再掲

b. 上下の人目も如何敷候へば、此かたへ御入候まじや (11b) の再掲

c. また内々のことを、他人中でたづね申もいかゞしい。 (11d) の再掲

ところで、樋口(2001)は形容詞の評価性について、「形容詞が人や物の特性をさししめるとき、さししめられる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、何らかの基準との比較のなかでとらえられてもいる」と述べる^(註13)。そのように比較することによって対象の意義が明らかになるとし、その主体的なかかわりを「評価」と呼ぶ。八亀(2008)はその考えを受けて、「この部屋広いね」という文を例にとり、「広い」という特性が、「この部屋に客観的にそなわっている特徴としてさしだされる」一方で、話し手が、「今までの自分の経験」「この部屋を何に使いたいかという目的意識」などを勘案して「広い」という評価を下していると説明する。

これを踏まえると、「いかがわしい(いかがしい)」は、不審な、是認しがたい事態(客観的な面)に対して、好ましくないこと(主観的な面)を表す評価的な形容詞である。その評価・判断の基準が、社会通念的なものであればあるほど、客観性が高まり、「対象がそのように判断される属性を有している」ということが前面化したのではないだろうか。よくないという性質を含意したうえで、その内実を明示しない婉曲的な表現であったことが、特に〈道徳上、風紀上好ましくない〉ことを表現するのに適していたといえよう。

なお、この「いかがわしい」の意味変化は構文上にも現れている。前代の「いかがしい」の場合、中世～近世前期にかけては、判断内容を連用修飾する例(いかがしく存ず／候／ござる など)が中心であった(→表3)が、近世後期以降、「いかがしい」「いかがわしい」ともに対象の属性やありさまを表すような連体修飾の例が中心となり、連用修飾の例は次第に減少する(→表3・4)。

表3 「いかがしい」の推移

時代	年代	資料	連用修飾	連体修飾	その他	計
中世	~1603	古記録	1	0	0	
		古文書	7	1	0	
		その他	2	0	已然1	
	計		10 (83.3%)	1 (8.3%)	1 (8.3%)	12
近世前期	1603~ 1750頃	古記録	2	0	0	
		古文書	9	1	0	
		口語資料	5	1	0	
		その他	1	0	0	
	計		17 (89.4%)	2 (10.5%)	0	19
近世後期	1750頃~ 1868	古記録	6	12	0	
		古文書	7	23	終止2	
		口語資料	1	0	0	
		その他	2	0	終止2	
	計		16 (29%)	35 (63.6%)	4 (7.2%)	55

表4 「いかがわしい」の推移

時代	年代	資料	連用修飾	連体修飾	その他	計
近世後期	~1868	歌舞伎 台帳	2	0	0	
	計		2 (100%)	0	0	
近代 (明治)	1868~ 1912	雑誌	3	17	終止1	
		文学作品	0	4	0	
	計		3 (12%)	21 (84%)	1 (4%)	
近代 (大正)	1912~ 1926	雑誌	0	10	終止1	
		文学作品	0	10	終止2 已然1	
	計		0	20 (83.3%)	4 (16.7%)	
現代 ※参考	計		8 (5.2%)	114 (74.0%)	32 (20.8%)	154

4. 「いかがしい」から「いかがわしい」へ

近世末～近代初期の「いかがしい」「いかがわしい」は、その意味・用法を同じくしており、近代に入ると両者の使用状況が逆転する。その「交替」と目される時期については、「いかがわしい」の調査内での初出が1794年の歌舞伎台帳の例であること、1840～60年代生まれの人物が「いかがわしい」のみを用いる

ことからすると、おおよそ1800年代前半（おおよそ幕末期）に、両形式の勢力は入れ替わったのであろう。

さて、2節で確認したように、中世以降の接尾辞「ハシ」は既存のシク活用形容詞をもとに二次的に語を派生しており、「いかがしい／いかがわしい」もその特徴に該当する。ただし、ほかの「Xシ／Xハシ」のペアの場合は「Xハシ」が衰退するのに対して、この対のみ、「いかがしい（Xシ）」が使用されなくなり、「いかがわしい（Xハシ）」が現代語に残る。近世においては「いかがしい」が主流であったにもかかわらず、なぜこのような変化が生じたのであろうか。

本稿ではこの変化の要因として、「いかがわしい」と意味の通じる「うたがわしい（疑）」の影響を指摘する。^(注15)以下には、『和英語林集成』（初版、1867年）における「イカガシイ」および「ウタガハシイ」の項目を挙げた（下線部は稿者による）。この辞書の編纂時期には「いかがしい」「いかがわしい」の両形式が併存していたと思いが、^(注16)「いかがわしい」は立項されない。

(24) a. IKAGASHII, -KI, イカガシイ, 如何敷, Doubtful, dubious, uncertain.
Amari ikagashii kara itashimasen, as it is very doubtful, I shall not do it.

Syn. OBOTSUKANAI, UTAGAWASHII.

b. UTAGAWASHII, -KI, -KU, -U, -SA ウタガハシイ, Doubtful, uncertain,
suspicious. Syn. FUSHIN-NA, GATEN-YUKANU.

ここで注目されるのは、双方の類義語に、“Doubtful” “uncertain” といった共通する単語が見えることである。また「いかがしい」の類義語には「おぼつかない」のほか、「うたがわしい」が挙げられており、「Amari ikagashiii kara itashimasen（アマリイカガシイカライタシマセン）」という例文は、「疑わしい」にも換言可能であるといえる。以下には近世末の注釈書類に見える「いかがしい」の例を挙げたが、このように文字や言葉の使い方に疑義を呈する例がしばしば見られることも、「疑わしい」との意味の近さを想起させる。

(25) a. ふるきかなにあのかなに似て「み」と書くかな有。これ見の略なり。みとよんで通ぜること古書に往々有之。日本紀にもあるなり。今時から思へばいかゞしき仮名なれどもふるくはかやうに用たること今これらもその残れるならん（坂徴 [1697生] 『かげろふの日記解環』中巻〔天明年間刊〕）

b. 此給ひ候と云こといかゞしき詞なれども例あることなり

（田中躬之 [1796生] 『竹取物語抄補注』巻上〔幕末〕）

これは「いかがわしい」においても同様である。(26a) の例は、戦場にて、形見として文を託すという場面であり、生きて再び会えるかどうか「疑わしい」

ことが表現されている。また(26b)は『外題年鑑』(浄瑠璃作品の総目録)の翻刻における凡例の一節であるが、先に見た(25)と同様の用いられ方をしていることがわかる。

- (26) a. いづれ此の世にて御目もじ相叶ひ候や、如何はしゆ存まるらせ候へば、つたなき此の文をわがかたみとも御覧はし給り度 (20c)の再掲)
- b. 本文はすべて宝暦本に依る。仮名づかひ、字づかひ、ならびに偽字等、今の眼には如何はしく見ゆるもの少なからずと雖も、姑らく舊に拠り古を存し、猥りに武断して改むる事無し

(『参考今昔操浄瑠璃外題年鑑』・凡例〔1905〕)

このように近世～近代初期には、「いかがしい」「いかがわしい」ともに、「疑わしい」と共通する意味を有していた。近世において「いかがわしい」はほとんど文献上に例が見えず、近代以降の接尾辞「ハシ」の勢力も弱いことからすると、近代に入ってすぐに「いかがしい」から「いかがわしい」へ交替することは考えにくい。しかしながら、意味・音形がよく似た「うたがわしい」の語形に引かれて、^(注17)「いかがわしい」の語形が受け入れられ、やがて交替したと考えることは蓋然性が高いように^(注18)思う。当期における意味・用法に大きな差異がなかったために、併存することは無く、片方は消失したのであろう。

5. おわりに

本稿では、「いかがわしい」の成立から定着に至るまでの過程について、類似した形式である「いかがしい」と併せて考察し、以下のことを述べた。

- I. 「いかがわしい」という語は、近世後期以降に文献上に見え始め、近代以降に一般的に用いられるようになる。中世から近世にかけて使用されていた「いかがしい」と意味的・形態的に類似しており、接尾辞「ハシ」による二次的な派生形容詞として成立したものと見られる。
- II. 幕末頃を境に、「いかがしい」の使用例は減少し、「いかがわしい」の使用が一般的となる。両形式が併存しなかったのは、当該時期における両者の意味・用法が概ね共通していたためと考えられる。そのとき、「いかがしい」ではなく「いかがわしい」の語形が中心となったのは、意味のよく似た「ウタガワシイ」という語の音形に引かれたものと推定される。
- III. 「いかがしい」と「いかがわしい」は近世初期ごろまでは同様の意味を表していた。基本的には、表現主体のいぶかしむ気持ちや、よくない

という評価そのものに焦点が当たっていたが、次第に、社会通念に照らして「いかがなものか」と思われるさまそのものに焦点が当たるようになり、特に〈道徳上・風紀上好ましくないこと〉を表すようになったと考えられる。

「いかがわしい」は、接尾辞「ハシ」による派生形容詞の一つと考えられるが、その他の語群と異なるふるまいを見せることについて課題が残っていた。本稿では、意味・形態ともに類似した「疑わしい」の影響と解釈することで解決できることを示した。

- (注1) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を用いて検索した。(検索日：2019年10月15日、キー：語彙素読み="イカガワシイ")。引用の際、サンプルIDと開始位置を併せて示した。
- (注2) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の「いかがわしい」の語釈(1)～(3)を参考に、簡略化して示した。→(1) 疑問に思われる。疑わしい。また、正体ははっきりしない。信用できない。あやしい。(2) よくない。よろしくない。下品である。いかがらしい。(3) 道徳上、風紀上好ましくない。
- (注3) 村田(1991)では、『日葡辞書』の項目調査の結果、「～ハシ」の新語が得られないことに触れ、接尾辞「ハシ」が近世以前に衰退していた可能性を示唆している。
- (注4) 「ありつかはし」は動詞の形容詞化であり、中古と同様の造語を行う。これはこの語の成立が、上接語の変化の過渡期にあったことを示すものとする。
- (注5) 「に」の撥音化とそれともなう「か」の濁音化により「いかにか」>「いかが」>「いかが」へと転じたとされる。『日本語文法大辞典』(明治書院)など。
- (注6) 日本国語大辞典「いかが」の語誌には、形容動詞語幹「いかが」について「意味はもとは上代の「いかにか」「いかに」とほぼ同じであるが、平安期以降ほぼ状態や様子に限定されながら、鎌倉期には「その様子が望ましくない、困ったものだ」という意味を派生する(中世後半から近世になると「いかがし」「いかがはし」を派生する)」という記述がある。『時代別国語大辞典 室町時代編』(角川書店)の「いかが」(形容動詞)の語釈には「物事の実態に接してそれを是認しがたいこととし、それに対して消極的態度をとるほかない意を強調して示す」「それでよいだろうかと疑念が持たれ、むしろ、それではよくないだろうと思われる状態である」とあり、その性格を把握するうえで参考になる。
- (注7) 用例(11a・b)は北崎勇帆氏(高知大学)の教示による。
- (注8) 次のような例である。「誠雖輕微至極候、宇治茶二袋令進入候」(弘中武長書状・永正九年二月二日[1513])
- (注9) 「古記録フルテキストデータベース」、「古文書フルテキストデータベース」(東京大学史料編纂所 <http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>)を利用して検索した。検索日：2019年6月23日、キー：「如何敷」「如何舖」「奈何敷」「奈何舖」「如何し」「いかにし」「いかにし」「如何ハ」「いかにし」の例は見られなかった)。なお、すべての例に振り仮名はなく、「いかがはしく(き)」と読む例を含む可能性もあるが、本稿ではすべて「いかがしい」の例として扱った。

(注10) 調査対象は、雑誌：『日本語歴史コーパス 明治・大正編』、文学作品：『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』『同 大正の文豪』。検索日：2018年6月27日、前者については、キー：語彙素読み="イカガワシイ"で検索。後者については、キー：“(如何|いかが) [はわ] し”で検索した。なお、『国民之友』（1888年）に2例「如何しき」が見られるが、ルビがなく、読みが確実でないため例に含めなかった。そのほかの内訳は以下の通り。

時代	ジャンル	例数	内訳	計
明治	雑誌	22	『女学雑誌』（1894年）1例、『女学世界』（1909年）1例、『太陽』（1895年2例、1901年8例、1909年10例）	25
	文学作品	3	樋口一葉『たけくらべ』、夏目漱石『門』『抗夫』各1例	
大正	雑誌	11	『太陽』（1917年）2例、同（1925年）5例、婦人倶楽部（1925年）4例	24
	文学作品	13	徳田秋声『あらくれ』、森鷗外『雁』、里見弴『多情仏心』、夏目漱石『道草』、芥川龍之介『芋粥』『開化の良人』、梶井基次郎『檸檬』各1例、幸田露伴『晋の僧法顯南アメリカに至る？日本に来る？』2例、島崎藤村『夜明け前』4例	

- (注11) 該当部分は、引用（発話者：品川彌二郎1843-1900、長州藩士）
- (注12) 『日国』における語釈（3）〈道徳上、風紀上好ましくない〉に挙げられる初出例は1975年のものだが、この意で解釈可能な用例はさらに遡ってよいように思う。例えば雑誌『太陽』1901年8月号には「報知や二六の衛生顧問或は女醫者など云ふ欄には随分、いかがはしい記事が多いが、あれは少しく注意して、遠慮するやうにしては什麼だい。なんば科學的に書くのぢやからとて、公然風俗壞亂的説明を縷述するのは、ひどからうぜ。」というように公序良俗に反するようなことを「いかがわしい」とする例が見られる。近世においても（12b）のように女性が二夫にまみえることについて批判するなど、文脈によっては〈道徳上、風紀上好ましくない〉と判断できる例もあり、連続的であるといえる。
- (注13) 西尾（1972）においても、形容詞の特性として「現実の世界のものごとに関する客観的な側面とそれらに対する人間の側の気持ち・受け取り方など主観的な側面」があること、それに伴う評価性について述べられている。
- (注14) 類似した例として「いやらしい」がある。
- (注15) なお「疑わしい」は動詞「疑う」が形容詞化したもので、接尾辞「ハシ（ワシイ）」による派生語ではない。
- (注16) 初版から第三版まで、すべて「いかがしい」のみ掲出される。「いかがわしい」が採られない理由としては、従来よく用いられていた「いかがしい」が、規範的な語として選ばれたものかと考える。このほか、例えば明治13（1880）年刊の『消息往来：増字』でも「如何敷」に「いかにしく」の振り仮名が見え、「いかにしく」は併記されない。これは定型表現であることも作用したものと考えられる。
- (注17) なお明治期の雑誌・文学作品を対象に用例収集した結果、「いかがわしい」が併せて27例であったのに対し、「疑わしい」は133例が得られ、単純な出現頻度の差が見てとれた。
- (注18) 「いかがわしい」は先に見たように、次第に〈道徳上、風紀上よくないこと〉の意を示すようになる。中世以降の接尾辞「ハシ」による派生形容詞が衰退した要因として、既存の形容詞との意味差が不明瞭であることを挙げたが、「いかがわしい」の場合は独自の意味を持ちえているため、これが定着を促した要因の一つとも考えられる。

参考文献

- 辛島美絵 (2003) 『仮名文書の国語学的研究』 清文堂
阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』 角川書店
西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』 むぎ書房
村田菜穂子 (1988) 「形容詞化接尾辞——～ハシ・～マシについて——」『甲南国文』 35
村田菜穂子 (1991) 「形容詞化接尾辞——～ガハシ・～ガマシについて——」『甲南女子大学大学院論叢』 13
村山実和子 (2019) 「接尾辞「ハシ(ワシイ)の変遷」『日本語の研究』 15-2
八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究——類型論的視点から——』 明治書院

引用資料 (引用に際して旧字体を新字体にするなど表記を私に改めた箇所がある)

万葉集・土佐日記・枕草子・伊勢物語・源氏物語・夜の寝覚・十六夜日記・三冊子・堀川波鼓・東海道中膝栗毛・英草紙：新編日本古典文学全集 (小学館) / 恵信尼の消息・中華若木詩抄・春色梅見誉美：日本古典文学大系 (岩波書店) / サントスの御作業の内抜書：福島邦道『サントスの御作業 翻字・研究篇』 (勉誠社) / 御伽草子：室町時代物語大成 (角川書店) / 虎明本狂言集：大塚光信編『大藏虎明能狂言 集翻刻註解上・下』 (清文堂) / 花の名残：浮世草子刊行会叢書 (浮世草子刊行会) / 五ヶ津余情男：江戸時代文芸資料 (国書刊行会) / 小栗十二段：元禄歌舞伎傑作集 (早稲田大学出版部) / 傾城青陽鶴：歌舞伎脚本傑作集 (春陽堂) / お染久松色説販：日本戯曲全集 (春陽堂) / 新板書札調法記：重宝記資料集成 6 往来物 (臨川書店) / 竹取物語抄補注：国文注釈全書 (皇学書院) / かげろふの日記解環：国文学註釈叢書 6 (名著刊行会) / 参考今昔操浄瑠璃外題年鑑：新群書類従 3 (国書刊行会) / 和英語林集成：J.C.ヘボン著・飛田良文他編『和英語林集成：初版・再版・三版対照総索引』 (港の人) / 捷解新語：林義雄編『捷解新語 四本和文対照』 (専修大学出版局)、康遇聖著・京都大学文学部国語学国文学研究室編『捷解新語：三本対照』 (京都大学国文学会)

なお、用例調査にあたり、以下のデータベース、サービス等を利用した。

国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』 <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>
/ 国文学研究資料館『断本大系本文データベース』 http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi / 『帝国議会会議録検索システム』 <http://teikokugikai-ndl.go.jp/> / 国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン2019.3、中納言バージョン2.4.2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> / ネットアドバンス Japanknowledge Lib <https://japanknowledge.com/library/>

【付記】 本稿は第274回筑紫日本語研究会およびハナの会2016年度春季研究会における口頭発表を加筆修正したものです。発表に際し、貴重なご指摘・ご教示を賜りました先生方に感謝申し上げます。なお本稿は、科学研究費補助金 (若手研究 (B)、課題番号17K13471) による研究成果の一部です。

(むらやま みわこ・福岡女子短期大学講師)